

金谷氏訳注の「孟子」は、初刷が上巻・昭和三十年八月、下巻・三十一年二月、出版以来すでに十年の時を経て、すでにその評価の確立した好著である。従っていまさら紹介に及ぶまでもない次第だが、たまたま去る七月、「中国の思想」シリーズの中に含まれた今里禎氏の「孟子」を読み、同じ古典の現代的パラフレイズという似たようなしごとが、結果としてどれほどの差を生むものかを改めて感じないわけにはいかなかったので、ここには、今里「孟子」との比較という形で取り上げたいと思う。

まず、金谷「孟子」の特色は、訳者の正面切った姿勢―原著者への傾倒の烈しきにある。冒頭の解説中にも、控え目にと努めているようであるがそのほれこみ方はいかにも鮮明に現われている。「彼（孟子）のはげしい熱情を感得」し、「われわれもまた新しい倫理への意欲」を持つべきだと言ひ、「われわれも、また孟子とともに、それ（性善説）を信じなければならぬ」と説き、さらに「われわれが自ずからの内なる高貴なるものを自覚し、また他人の心性も同様であることを意識して、互いに尊敬をささげつつ、それを守り育てることをつづけてゆく強い意志をもつなら、真の道德的世界の建設も決して不可能ではない」と論じる辺になると、孟子の思想の解説

というより、孟子を通して自身の信念を語る意欲の方が先行していかねない気配がする。もちろん、数多い古典の中から一冊を選んで注解を加えようとする場合、わざわざ気に入らぬ著作を取り上げる人も無いわけだが、それにしても、この場合の金谷氏のひたむきな態度は、全篇を読み通す時、実に見事な重量感をもたせて、わたしたちを孟子の説得の流れに巻きこまざるにはおかないのである。と言つて、決してその注解が、恣意的に誇張されたものというわけではない。むしろわたしたちは、「優れた古典の価値は、結局、その古典みずからに語らせるのが第一」という立場を、訳者自ら冷静に守っているところに、この書の権威性を見なければならぬのである。古注・新注によりかからず、焦循の考証・訓詁を多く採つたというその訓読は、随所、従来の国訳では不明瞭だった点に合理的な解決をもたらしており、一つ二つを例として挙げてみるまでもないほどである。

孟子曰。春秋無義戰。彼善於此。則有之矣。征者。上伐下也。敵國不相征也。――孟子曰わく「春秋には義しき戦なし。ただ彼の此より善しとすべきものはこれ有り。征とは、上のひとが下のものを伐つことなり。敵しなみの國にては相いに征することはあらず。」

この著作の、類書と異なる特徴は、右のような、文義に密着した新訓読体であり、着実明瞭に原典の内容を翻訳しながら、同時に「簡古な力強い趣き」を再現しようとする訳者の苦心に注目しなればならない。

ただし、この点に関してはまだ今後の課題が残されている。なぜなら、先人たちが国語の膠着性を犠牲にして作り上げた従来の訓読体が相変らず日本語の一文体として残されており、そのいわゆる漢文調は、漢語を不消化のままに投げこんだ舌足らずな表現自体を一言い変えれば口語文との距離の遠さを―価値条件としているものだからである。

苟も義を後にして利を先にするを為さば、奪わずんば鑿かず……とする慣習から見れば、苟めにも義を後んじて利を先ぶことをなさば、奪わざれば鑿かじ……という訓読は何となく歯切れが悪いとなるであろう。その上、現在の高校課程での訓読も完全にオールド・ファッションのままなのであるから、新しい読者層にとっては、普通の文語訳を下敷きにしてからこの新訓読体に接する、という手順を経ないと、原文を訓読することによってそのまま内容を理解する妙味（つまり金谷氏の苦心）は味わえないことになる。特に要語・要旨の解説は有るが、全文の口語訳は無い、という構成から見ると、始めて孟子を読もうとする場合は、金谷氏の訓読文を孟子の本文として割り切ってしまう限り、全章を読み通すには大変なエネルギーが必要となるであろう。ここに、この本の試みの新しさと、新しいための不安定さが背中合わせになっている。

しかし、これを始めに挙げた今里氏の「孟子」と比べて考えると、なると、がらりと話が変わってくる。中国の思想シリーズは標題も訳

文もすべて現代語であつて、そのあとに参考という形で原文と書き下し文とが示されている。そしていわばサワリとも言うべき部分を要領良く抜き出し、「仁義こそすべて」「五十歩百歩」「政治的殺人」……といったキャッチフレーズを冠せてスマートにまとめ上げている。率直に言つて今里「孟子」で買えるのはその「気楽」なスタイルであつて、こうした気楽な本が中国古典の現代への紹介のために―少くとも教養書として現われたことが、改めて金谷氏の十年前のしごとを、今でも新しいしごとである、と確認させてくれたのは皮肉と言うほかはない。

今里「孟子」の本文である口語訳は平易である。しかしその平易さは、金谷氏の苦勞を経たものではなく、従来からの漢文学習者用の参考書の訳文をそのまま取り上げた、対訳用口語文の域を出ていない。のっぺらばりの死んだことば、原文によりかかった生気の無い文章である。口語訳を真つ先にかかげる以上は、孟子の景氣の良さをぶちまけた文体を創出するくふうこそ必要であろう。「惻隱の心は仁の端なり」を、「かわいそうだと思う心は仁の芽生えである」とするのは余りにも優等生の試験答案的すぎないだろうか。かつて五十沢二郎が「新約中国古典抄」で見せた「同情の心は愛の第一歩である」といった調子の意識―が無理なら、「惻み隠む心は仁の端なり」とする金谷氏の読み方の落ち着きぐあいに賛成したくなる。翻訳には、良かれ悪しかれ、その書物の内容を読者により強くおしつけようとする訳者のずうずうしい根性が必要である。その限りにおいて誇張的訳出は許容されることもありうるが、原作のスケールを萎縮させた筆致は承認のしようがない。今里氏の訳によつて読み進んだ時に浮び上ってくる孟子のイメージが、誠に丁寧な物静か

な分別くさい口のうまい人物、となつてしまふのは、わたしひとり読み方が悪いからだろうか。

そう思つて見ると、解題の一、「孟子は道学者か？」の中にある「説教臭い」という「先入観を捨てて、生きた人間として、また現実と真正面から取り組んで思索した思想家として、虚心に孟子そのものに接近しよう」とする今里氏の立場は極めて正當なものであるが、さてそれを先の強引な金谷流の接近ぶりと比べたとき、結果として「古典の生命力を現代に生かす」のはどちらの方が。古典すべてとは言わないが、少くとも孟子のようなアクの強い著作に限つては、吉田松陰の講孟余話にその一例を見る通り、とことんまで打ちこんだ姿勢によつて始めて演繹できる特異な要素を深く内蔵してい

金谷 治『秦漢思想史研究』書評

はじめに著者はいう。「哲学史としては成立しえなくとも、思想史としては可能であるばかりでなく、むしろ積極的にきわめて重要な意味を持つ」そういう時代があると。秦漢期こそまさにそれである。たしかにこの時期には体系的論理的な述作というものは少ない。しかし戦国の抗争から秦の統一、そしてまたたくまの崩壊、漢の興隆やがて帝国の完成へとつらなるこの激動の時代こそ、いっそう人々の真摯な活動、つまり歴史的な転換を迎えつつある現実と自己存

に解明せられねばならない。本書はこうした問題意識に支えられて出発する。そして本書は従来の先秦思想史を補正するばかりでなく、さらにすすんで「秦漢古代帝国の実質的な完成への歩み」をも示すことになるのである。

さて、本書は五章から構成される。すなわち、第一章「秦漢の法術思想」第二章「漢初の道家思潮」第三章「秦漢儒生の活動（上）」第四章「同（下）」第五章「淮南子の研究」である。さらに巻末に「賈誼の賦について」が附載される。そこで以下章を逐いながら要旨を紹介することとしたい。ただ予め断つておかねばならぬことは、各章は法家なり道家なりにくくられて一応思想の派別ごとに説かれているが、実は各章は決して排他的に独立するものではない。諸派の思想は同時的対立的であるとともに入り乱れ絡み合う関係のもとで全体の思想の流れを形成するものであるということである。ところで第一章 秦漢の法術思想では、まず極点を示した秦帝国の法術思想とはどのようなものであつたか、そしてそれが秦の崩壊後いかに変化し、さらに漢帝国の裏面を支えるものとしてどのように姿をかえていったかが問われる。法理論の完成者はいうまでもなく韓非である。韓非の真の目的は絶対的な統一権力にもとづいて国家機構を強化し強制的な支配体制をつくりあげることによつて、力関係において闘争する現実の混乱を匡救することにあつた。そのための法理論の展開であつた。そして韓非の法はその実証的客観的な面ではたしかにすぐれていた。しかしそれがあまりにも君主中心的に考えられていること、また永続的な法の実質的根拠への配慮を欠く点、さらには経済政策をもたないこと等に弱点をもつものであつた。こうした韓非の弱点は漢代に至つて漸やく修正される。

ることを疑えない。

金谷氏の訳注は、まともに八古人への接近Vを果そうとする貴重な試みである。毛を吹いて微瑕を求めても自慢にはならないだろう。

金谷治『孟子』（吉川幸次郎監修「中国古典選」・朝日新聞社、上・第一回配本・昭和30年8月・272p・三〇〇円、下・第三回配本・31年2月・346p・三三〇円）。

著者・金谷（旧姓・多気田）治氏は、本学専門部国語漢文学科昭和16年卒業、東北大学文学部卒業、現職・東北大学文学部（中国哲学）教授・文学博士。

町 田 三 郎

在との相剋対立をうながすものであつた。にもかかわらずこの時代は、従来いわゆる先秦諸子の思想と漢王朝の儒教的イデオロギーとの間にはさまつた、いわばつなぎの時期とみなされ思想史的にはほとんど空白のまま放置されてきた。むろんそれにはそれなりの理由、例えば文献的な面からの制約、資料面からする困難な事情等があつた。しかし現に秦漢の古代帝国は存在する。当然その成立の要因は、たとえそこに困難な諸事情があるにせよ、なんらかの形で思想史的

晁錯・賈誼の中央集権政策にともなう農民生活への注目、経済と国家権力との関係への顧慮などを通じて次第に立法も人情にもとづかねばならぬとする反省も生れてきた。これは多分に儒家思想との交流の中から生れ出た意見であつたが、一方では道家思想と接触することによつて重大な法理論の修正も行なわれた。すなわち道家の道や無為を法や君主権におしあて、君主の地位や法の客観的権威を道に結びつけることによつて安固にし、同時に変化する法の背後に一貫した根拠を求めようというのである。韓非の弱点はこうして時をおつて補強修正されつつ新統一帝国の理論として現実化の道を歩む。一方現実の歴史の舞台では、政治の技術面を担当して通常酷吏と呼ばれる一団の法術主義者が活躍する。彼らは君主と直結しひたすら君主の手足となりつつ君主独裁権を強化し、自らも現実の政治面における政治技術者として安定した地位を築きあげていく。

第二章 漢初の道家思潮では、まず一・二節において呂后専制のもとでいかに政界人が保身の術に汲汲としたかまたこの時代にどれほど人生朝露の嘆きが一般的であつたかを説く。保身といふペシミスティックな嘆きといひ、いわばムードとしての道家がここにはある。そしていわゆる道家思想の実相は三節 黄老の術について、四節 道家思潮の派別で明らかにされる。一体漢初の道家思想ということと必らず黄老の術がいわれるのであるが、その実体は決して明確ではなかつた。そこで黄老の系譜、またその術者を仔細に検討してみるとそれはおおよそ次の如きものであると結論できる。黄老の術とは、たしかに道家思想にもとづくものではあるが、それはあくまで現実の政治に強いかかわりをもつ「百姓を安集」することを念頭として、そのために無為清静を標榜した政術としての道家の一派であ